

サブサハラ・アフリカのイスラーム

甲斐信好

(拓殖大学国際学部教授)

サブサハラ・アフリカ（黒アフリカ）のイスラームは二つのルートを通じて伝播した。一つはアラビア半島からアラビア湾、紅海、インド洋を通じての東アフリカへのルート。「海洋」経由である。もう一つは北アフリカから広大な「陸の海」サハラ砂漠を経た西アフリカへの浸透である。後者（陸の海）が前者（海洋ルート）を凌駕する勢いで広がり、西アフリカでは一五世紀までにイスラームが主要な宗教となつた。

西欧列強のアフリカ植民地支配とキリスト教の布教がこれに続いた。そのルートは大西洋・ギニア湾など海洋を通じてのものであり、主要な都市は海岸沿いに作られ、キリスト教は海岸地域から内陸部へと布教が進められた。複雑なエスニックの問題とも重なり合い、ナイジエリア

に典型的に見られるように、内陸部のイスラーム、海岸部のキリスト教の抗争を生む一因となつた。

二一世紀に入り、「アラブの春」とリビアの崩壊は、結果としてサハラ砂漠を通じていわゆるイスラーム過激派の拡散を招いた。いくつかの西アフリカ・中央アフリカ諸国は国内の混乱に收拾がつかなくなつていて、本稿の最後では、一九九四年の虐殺をきっかけとして、ムスリムへの改宗が進んでいるというルワンダの現状について考察する。

二つの「海」による伝播・植民地化以前のイスラーム

北緯一〇度線は、イスラームが主要な宗教であるサブ

サハラ・アフリカの国々を貫いている。すなわちシエラレオネ北部、コートジボワール、ガーナ、トーゴ、ナイジェリア、カメルーン、中央アフリカ共和国、エチオピアとソマリアである。偶然ではあるが南スーザン分離前のスーザンとチャドのイスラームとそれ以外の宗教を分かつラインともなっている。また北緯一〇度線より北のガンビア、セネガル、マリとニジェールもイスラームが優勢な宗教である。⁽¹⁾

イスラームはサブサハラ・アフリカにとって外来宗教である（もちろん早くから人々の生活に根を下ろしているイスラーム）。

「外来」という表現が当てはまるかどうかは議論の対象であるが⁽²⁾。その最初の伝来は古い。西アフリカの場合八世紀、東アフリカの場合は七世紀末にはすでにイスラーム化の第一波が押し寄せていて、イスラームは成立後一世紀足らずしてサブサハラ・アフリカに到達したことになる。

七世紀にアラビア半島でムハンマドによってイスラームが成立すると、北アフリカの地中海沿岸地方（マグリブ）へまたたく間に広がった⁽³⁾。七一年にはマグリブ全体とスペインがイスラームの支配下に入った。エジプトからモロッコに伝わったのは七世紀頃だが、その後モロッ

コから西アフリカに伝播した。つまり西アフリカへはアラビア半島から北アフリカ経由で広がっていったのである。

西アフリカのイスラームはサハラ砂漠を通じてサブサハラ諸国に伝播した。面積約七八〇万平方キロメートル、東西約四九〇〇キロメートル、南北約一六〇〇キロメートルに及ぶ世界最大のサハラ砂漠は、一般に考えられているようない北アフリカと西アフリカを分かつ障壁というよりは、ラクダという「陸の船」が行き来する巨大な「陸の海」であった。

東アフリカの海岸地帯は「スワヒリ」と呼ばれ、西アフリカのサハラ南縁地域は「サヘル」と呼ばれるが、語源的にはどちらも「海岸」「岸辺」を意味するアラビア語に由来している。イスラームはまさしく一つの「海」を通じてアフリカに伝わったのである。⁽³⁾

しかし東アフリカと西アフリカではイスラームの発展は異なった。西アフリカではイスラームは社会の広範囲に浸透し、現在イスラーム圏は西アフリカ内陸部のほぼ全域を覆っている。一方で東アフリカでは長い間イスラームの影響は、海岸地帯に限られてきた。サハラ砂漠を通じた対外的な交易活動を担ったムスリム商人にとって、

交易の相手もまたムスリムであることが要求された。イスラームに改宗することによるメリットもあった。一方

でインド洋交易を通じて活躍したのはアラブ人の奴隸商人である。地域的にも活動は海岸地方に限られた。

交易活動に加えて七世紀からのジハード（聖戦）が西アフリカのイスラーム化を加速した。一一世紀（一二〇六年）に異教徒の王が治めるガーナ王国がムスリムの手によって陥落したのはその象徴的な出来事である。

イスラームは宗教としてのみならず、文化としてもサブサハラ・アフリカに受け入れられていった。たとえば、体を清潔に保つことや、アルコール類を飲まないこと、清潔な衣服を身につけることなどは、それまでの現地の文化を変容させることでもあった。

嶋田によれば、アフリカ人にとってイスラームの教えとは何よりもまず「清潔さ」であった^①。イスラームはアラビアの砂漠で生まれた宗教である。砂塵にいつもさらされる世界で生まれた宗教である。砂塵は鼻の穴にも、耳の穴にも、髪の毛にも潜り込む。足や手もすぐ砂にまみれてしまう。こうした汚れを清めるシステムを確立したのが、一日五回の礼拝である。それは水の得難い乾燥地でわずかな水を利用して清潔を保つための優れたシステム

でもあつたという。

金の生産・交易によって繁栄したマリ帝国（一二三〇？～一五九九？）、北アフリカとの交易を支配したソンガイ帝国（一二〇一〇？～一五九二）、ハウサ諸王国などが成立し、一五世紀には西アフリカでイスラームは主要な宗教となっていた。一六世紀から一八世紀にかけてモーリタニアからスーアンまでがイスラーム化される。

一八世紀から一九世紀初めにかけては、遊牧民フルベの聖戦が始まる。フルベ・イスラーム国家はサブサハラ・アフリカで初めて成立したイスラーム神権国家であった。それまでのマリ帝国、ソンガイ帝国などは、元来、異教の国家として成立し、その後、王がムスリムとなるという形でイスラーム国家となつたものであり、その根に異教的な原理を残していた。

しかしフルベ・イスラーム国家の場合、初めからイスラーム原理に基づく国家として成立し、王も宗教的な地位を表す称号を用いた。聖戦を指揮したのも武人ではなく、イスラーム学者としての学識と徳を高く評価された聖職者・学僧であつた^②。

フルベの聖戦はイスラーム法に基づく純粹なイスラーム国家建設運動であり、アフリカ伝統宗教との混合（融

合) 主義に陥りすぎたアフリカ・イスラームをもう一度、純化しようという宗教改革運動でもあった。⁽⁶⁾

植民地支配と独立

このような状況の中で、西欧列強によるアフリカの植民地化が始まる。西欧列強がアフリカに植民地を獲得することに伴って、二〇世紀前半にキリスト教が爆発的に信者を増やしていく。信者の数はイスラームに劣るもののその伸びは急激である。二〇世紀の最初の半世紀、すなわち一九〇〇年から五〇〇年間のアフリカにおけるキリスト教徒の伸びは一〇〇〇万人から二億五〇〇〇万人であり、同時期のイスラームの伸びは三四〇〇万人から三億人と推定されている。⁽⁷⁾

キリスト教の急激な伸びは植民地化と同時に押しつけられた部分があつたが、一方でイスラームの伸びは原住民にとって反西歐的、反キリスト教・西欧文明的という政治的な面もあつた。キリスト教はヨーロッパ人の政治支配のための宗教と見なされていたのである。

キリスト教・西欧文明への反発もあり、西アフリカに比べて遅れていた東アフリカのイスラーム化が、ケニア

やタンガニーカ（現在のタンザニア）でも進んでいった。第一次大戦終了後一〇年間でタンガニーカのモスリムは人口の三%から二五%に増大している。東アフリカの民衆へのイスラームの普及にはターリカ（イスラーム神秘主義教団）の役割も大きかった。⁽⁸⁾

西欧列強のアフリカ植民地支配とキリスト教の布教のルートは海洋を通じてのものであり、列強によるアフリカ植民地化が海岸から内陸に進む形で行われた。その結果、アフリカはサハラ砂漠の中央で分断されることになる。サハラを介して、イスラームの物流・交通体系として形成を遂げてきた西アフリカ内陸部は、大西洋を中心とする海洋中心の物流・交通体系へ再編されることになったのである。⁽⁹⁾

西欧列強による植民地化で主要な都市は海岸沿いに作られ、キリスト教も海岸地域から内陸部へ布教が進められることとなつた。このことが複雑なエスニックの問題とも重なり合い、後に内陸部のイスラーム、海岸部のキリスト教の抗争を生むことになる。

第二次世界大戦が終了し、サブサハラ・アフリカの諸国にも独立の機運が訪れた。一九六〇年代は「アフリカの年」と呼ばれる。アフリカ諸国が次々と植民地支配か

ら独立していった時期である。六〇年代当時、セネガル、ソマリア、モーリタニア、ガンビア、ニジェールでは国民の八〇%以上がムスリムであった。ギニア、マリ、チャド、ナイジェリアとスー丹では半数以上が、コートジボワール、ガーナ、タンザニア、シエラレオネ、カーメルーン、エチオピアとブルキナファソでも一割から四割と無視することができない国民がイスラームを信じていた⁽¹⁾。

このように国民の大多数がムスリムであった国でも、しかしながら彼らが独立の中心となつた事例は少ないとハインズは指摘する⁽¹²⁾。西欧に植民地化されたアフリカの多くの地域で、近代教育のチャンネルはほぼキリスト教ミッション経営の教育機関であつた。独立の指導者は多くの場合キリスト教徒である。セネガルのレオボルド・サンゴールやケニアのジョモ・ケニヤッタなどの政治家はミッション系の教育機関で育成され、教員や郵便局員、役人など近代アフリカ運営の実務を支えるテクノクラークもそこで養成された⁽¹³⁾。

ハインズによれば、ムスリムは多くの場合、エスニックや国ごとに分断され大きな力となりにくかったし、彼らの指導者となるイスラームの指導者は現状維持的で独立もそこで養成された⁽¹⁴⁾。

立後の新しい秩序に馴染みにくかったとされている。独立のリーダー自身がキリスト教徒で、西欧の教育を受け、西欧と同じ政教分離型の国家を目指し、イスラームに対して後進性や保守的といった懷疑の眼を向けていた⁽¹⁴⁾。

イスラーム主義とパン・アフリカニズム、イスラーム過激派

イスラームの理念を掲げ最終的にはイスラーム法によって秩序づけられた国家（ウンマ）を建設しようという政治運動をイスラーム主義といふ。一九七〇年代頃からムスリム社会ではイスラームを前面に押し出した政治運動が顕著になってきた。背景には七九年二月のイラン革命の成功やリビアのカダフィの冒險主義がある。そのような現象、とくに戦闘性を帯びた政治運動を指す用語としてイスラーム原理主義という言葉が使われるようになつた。元来「原理主義」という用語はキリスト教のプロテスタンントの一派に使われたものであり、学術的に問題も多い⁽¹⁵⁾。

サブサハラのイスラーム原理主義と呼ばれる組織の起源には二つの流れがある⁽¹⁶⁾。一つはイランやサウジアラビアの正統派の影響を受けた改革派イスラーム。支持者に

は教育を受けた層が多く、「純粹な」イスラーム社会に到達することを熱望している。

もう一方にはナイジエリアに典型的に見られる、キリスト教とイスラームに分断された社会での、相手への「対抗勢力」として登場してきたもの。前のタイプに見られたような純粹なイスラーム社会を望むというよりは、キリスト教徒に対してのムスリムとしての「権利」を競うものであり、主張や行動は戦闘的になりがちである。

「対抗勢力」としての原理主義が、経済的格差の拡大、生活水準の低下など経済的低迷、国内の混乱と結びついで、しばしば過激な攻撃主義を生むようになった。

一方で、東西冷戦という枠組みの中で押さえつけられていたアフリカ人としてのナショナリティ、パン・アフリカニズム運動が、冷戦後的新しい秩序を模索する中で頭をもたげてきた。その端的な例がアフリカ連合（AU）の成立である。9・11事件をきっかけに、アメリカ合衆国がアフガン戦争とイラク戦争を始めて、世界の注目がアフガニスタンとイラクに注がれている間を縫うようにアフリカ連合が成立した。^⑯

きっかけとなつたのはカダフィである。彼は、アラブ・連盟からリビアを離脱すると同時に、サハラ共和国構

想を打ち出した。欧米列強による植民地化以前は、サハラ砂漠は北アフリカ住民もサハラの南の住人も行き来する交流の世界だった。そういう世界をもう一度再構築しなければならないと彼は考えた。サハラ共和国ができるならリビアはサハラに高速道路網や石油・パイプライン網を張り巡らせる覚悟があると宣言したのである。

アフリカ連合の初代代表となったのは、マリ帝国やソンガイ帝国などの強大なイスラーム国家を過去に有するマリの元大統領であり歴史家のウマール・コレであった。一方でカダフィは、アラブを含めたイスラームの盟主を諦める代わり、アフリカにおけるイスラームの盟主たるることを目指したのかもしれない。^⑯

このようなパン・アフリカニズムは、二〇一一年の「アラブの春」とそれに続く混乱によって新たな局面を迎えた。カダフィの冒險主義は、リビアの崩壊と彼自身の殺害によって潰えた。代わりにサハラ砂漠を通じて広がつていったのは、いわゆるイスラーム過激派と言われる集団であった。

カダフィ亡き後、リビアからは大量の武器が北・西アフリカ一帯に流出している。中東・北アフリカのアラブ・イスラーム世界から染み出したテロ組織や武器が、ガバ

ナансの脆弱なこの地域を根城に拡散しているのである。⁽¹⁹⁾

カダフイ政権の傭兵であつたトゥアレグ人たちが高性能の武器とともにマリ北部に流入し、二〇一二年クーデター後の権力の空白についてイスラーム過激勢力がマリに拠点を構えることになつたのはその例である。「海」としてのサハラを通じて西アフリカに広まつていつたのは、残念ながら健全なイスラームだけではなかつた。

二〇一三年一月に日本人一〇人を含む三九人が犠牲になつたアルジェリア天然ガス施設襲撃事件は、「イスラムマグレブ諸国」のアルカイダ（AQIM）⁽²⁰⁾が首謀者と目されている。AQIMは成立の経緯に注目する限り、アルジェリアの国内政治の歪みから生まれた土着勢力であつた。アルジェリア当局の徹底した取り締まりによつて國內で活動することが困難になつたAQIMは、活動域をサブサハラ・アフリカのマリ、ニジェール、モーリタニアに移した。広大な「陸の海」サハラ砂漠には当局の監視が行き届かず、国境線など存在しないも同然であつたからである。その身代金ビジネスとコカイン密輸の現場指揮官だったのが、天然ガス施設襲撃を首謀したとされるムフタル・ベルムフタールであつた。

「アラブの春」、そしてシリア内戦が始まつた二〇一〇

年以降新たな「難民」の波、大規模な脱出がやつて來た。これまでにない人間たちの移動が始まつたのである。中には戦争、迫害を逃れるというより新たな仕事、人生のチャンスを求めて移動する多くの人間たちもいた。

その中には、エリトリア、ソマリア、南スーザン、さらに寛くの西アフリカ諸国出身者たちがいる。密航業者が用意したボロ船に積載能力以上の人数を詰め込めば船は容易に転覆する。二〇一三年頃から地中海で沈没、溺死を繰り返していたのは主にこの群れである。一五年には三六〇〇人以上が地中海で溺死したとされている。

難民の中には多くのムスリムが含まれる。経済的格差から犯罪に手を染める者も出る。欧州各地で多発するテロを通してイスラーム過激派という名前が広く知られるようになつてしまつた。

現在も続く紛争・ナイジェリアをケースに

ナイジェリア共和国は現在、アフリカで最大の約一億九〇〇〇万人の人口を擁する。一世紀以降サハラ砂漠の交易ルート経由でイスラームが伝播し、ハウサ、フルベなど北部を中心に国民の約半数がムスリムである。一

九六〇年にイギリスの植民地支配から独立するが、悲惨なビアフラ内戦（一九六七・七〇年）など、三大民族集団（ハウサ、ヨルバ、イボ）を軸とした対立抗争が続いた。これにはムスリムが多数を占める北部とキリスト教徒の多い南部の対立も関連している。⁽²¹⁾

一九七〇年代に入つてからのイスラームの新しい動きとして、北ナイジエリアのカノで暴動を起こしたマイタチネが挙げられる。ムハマンド・マイタチネはイスラーム復興主義者で、七〇年代からハウサ、フルベのムスリムが社会の主流を占めるナイジエリアの北部で、イスラーム化の遅れた中央ベルト地帯の都市民や周辺諸国からの貧しい移民などを対象に、アッラーの真の預言者を名乗つて支持者を拡大した。

彼は異端的な教説を認めない主流派ムスリムに対して聖戦を宣言し、活動を過激化させた。一九八〇年にはカノで中央モスク占拠事件を起こし、四〇〇〇人（一説にはそれ以上）の死者を出す大規模な暴動に発展した。マイタチネ自身はこの時に死亡したが、支持者による暴動は八〇年代に入つてからも続いた。⁽²²⁾

マイタチネ運動の背景には、失業した若者や貧しい庶民の、石油ブームに乗つて急速に豊かになつた中間層へ

の反感があった。国有企業の民営化を含むIMF（国際通貨基金）主導の構造調整によって、多くの人が職を失つたのである。ナイジエリア政府や軍の汚職や、成り上がりの中間層の人目を引く消費が入りその怒りに火を注いだ。

彼らは「イスラーム的でない」とされた店や銀行、キリスト教の教会を襲い、ついにはイスラーム主流派をさえも攻撃するようになつたのである。⁽²³⁾ 経済格差や現状に対する不満が蓄積した時、運動はイスラームの名を借りた抵抗運動へと変容する。それは宗教運動というよりもむしろ政治運動であった。

現在もナイジエリアは潤沢な石油収入があるものの、政府の統治能力の欠如と腐敗、地域対立や紛争により大部分の国民は貧しい生活を強いられている。

二〇一五年三月にはナイジエリア大統領選挙が実施され、大方の予想を覆して元軍政トップのムハンマド・ブハリが当選した。一九九九年の民主化、新憲法以降初めての政権交代である。

野党の合併により地域横断的な政党・全進歩会議（APC）が誕生し、それが与党・人民民主党（PDP）離反組を吸収し多数派工作において成功を収めた。また前ジョ

ナサン大統領の、過激組織ボコ・ハラムや汚職に対する消極的姿勢が国民の不評を招いた。

ナイジェリアではその前回の二〇一一年の大統領選挙では選挙結果への不満から暴動が起り、八〇〇人を超す死者が出た。一五年も暴動が懸念されていたが、ジョンナサン前大統領が早々と敗北を認め、それによって支持者による暴動は回避された。

世界的に有名になった過激組織ボコ・ハラムは、現地語で「西洋の教育は罪」を意味するイスラーム・スンニ派の過激組織である。ナイジェリア北部の各州にイスラーム法の導入を目指して武装闘争を展開しており、「ナイジェリアのタリバーン」とも呼ばれている。その攻撃対象はキリスト教会、警察、政府関係施設から国連施設にまで及ぶ。

二〇一四年四月には、ナイジェリア北東部のチボックで二四〇人の女子学生を拉致して世界的な非難を浴びた。一五年一月にはボコ・ハラムはボルノ州で約二〇〇〇人の住民を虐殺した（ナイジェリア政府は一五〇人と発表している）。同月には少女による自爆テロも続けて起こった。これらのテロに拉致された女子学生が使われた可能性もある。ナイジェリア政府の腐敗や、軍からボコ・ハラム

への武器横流しの噂も絶えず、拉致された女子学生がどこに行つたのか、少数の解放者を除き真相は遅々として見えない。

ナイジェリアは石油による経済成長が続いているが、イスラームの強い北部とキリスト教が広がった南部の对立が解消していない。エスニック、地理的・宗教的分断がナイジェリアの政治を規定している。

二〇一六年三月には新たにニジエール・デルタ・アベンジャーズ（NDA）というグループが、ナイジェリア南部（ニジエール・デルタ）の解放を目的として名乗りを上げた。同グループの背景ははっきりしていないが、高度に訓練された破壊能力を持ち、「東ヨーロッパで教育を受けたグループ」と称している。同年五月には原油パイプラインの攻撃を開始、欧米系の原油施設を減産に追い込んでいる。

世界的な原油価格の低迷と相まって、輸出・政府歳入の多くを石油収入に頼るナイジェリア経済への影響は大きい。現ムハマンド・ブハリ大統領は借款を中心とした野心的な予算編成を行おうとしているが、目途は立っていない。

中央アフリカのケース

中央アフリカ共和国もまた、イスラームとキリスト教徒、エスニックの争いの中で苦しんでいる国家である。中央アフリカは人間開発指数（二〇一六年版）において一八八位（一八八カ国中）と最下位の国だ。

中央アフリカでは二〇一二年一二月、イスラーム系反政府ゲリラ・セレカが北部および東部を掌握した。一年三月には首都パンギを制圧、セレカの指導者でムスリムのジョトディアが大統領に就任した。共和国初めてのイスラーム政権である。

二〇一三年九月には大統領によりセレカの解散式が行われたが、武装組織そのものは温存された。イスラーム系のセレカに対してもキリスト教系ゲリラのアンチバラカが新たに登場し、両者の抗争で国内は無政府状態に陥った。

首都でもイスラームとキリスト教の対立が激化、数百人の死者が出たためフランスやAU軍が治安維持を目的として介入した。二〇一四年一月には混乱を收拾するためジョットディア大統領が辞任、二月にキリスト教徒の

カトリーヌ・サンバ・パンザが暫定大統領に選出された。

しかし政府はセレカとアンチバラカの衝突を十分にコントロールできないまま戦闘が続いた。国連安全保障理事会の決議によりAU軍を国連PKOに格上げ、フランス軍に事実上の指揮権が与えられた。

セレカは二〇一四年末までにいくつかの小グループに分裂したとされる。イスラーム系のグループと反イスラームでアンチバラカの対立で、国内避難民（IDP）は二〇万人に上り、半数が国外に難民として脱出した。

崩壊状態にある国家の統治機構の再建と、セレカ、アンチバラカ両グループの武装解除は容易なことでは進みそうにない。経済成長率はマイナス三六%（二〇一四年推計）であり、衝突の影響で悪化した経済の回復には一〇年はかかるだろうと言われている。

二〇一六年三月に大統領選挙が行われ、フォースタン・アルシャンジュ・トゥアデラ元首相が就任した。フランス軍は「治安状況は改善した」として同年一〇月には完全撤退したが、その後にも武力衝突は続いていた。「治安への懸念材料」「武装勢力を挑発しさらなる暴力を招きかねない」「フランスは中央アフリカを見捨てた」との声も聞かれる。

二〇一六年一一月にはブリュッセルで支援国会合が行われ、復旧の進捗状況報告や資金援助の要請が行われた。中国による北部での油田開発と、ダイヤモンドなど豊富な地下資源、農業への新たな投資により経済には回復の萌芽がある。

一方で、セレカの一部は中央アフリカ共和国東北部での独立国家を宣言している。近隣諸国に逃れた難民は二〇一七年現在でも四五万人を超える、国内避難民も三八万人を数える。國家の統治機構の再建と、セレカ、アンチバラカ両グループの武装解除は容易なことでは進みそうにはない。

ルワンダにおけるカトリックとイスラーム

本稿の最後に、筆者の研究対象国であり毎年訪れているルワンダのイスラームについて述べる。

ルワンダ共和国は中央アフリカにあり、国土は四国よりもやや大きいくらいの約一二万六〇〇〇平方メートルである。一九九四年四月から七月までの虐殺で世界中に衝撃を与えた。当時の人口七八〇万人のうち、わずか三カ月で八〇万人が殺されたとされる。

ルワンダはアフリカのスイスと呼ばれ、大部分は二二〇〇メートルを超える高原地帯からなる。「千の丘（ミル・コリン）の国」と呼ばれる美しい丘陵が連なる国である。内陸国であるが、そのために隣国のケニアやタンザニアのように奴隸貿易の対象とならずにすんだ。

国民は八割のフツ（Hutu）、一割強のツチ（Tutsi）、および一%未満のトゥワ（Twwo）からなる多民族国家である。ヨーロッパ人が入植する前から王国が存在したが、その王の家系はツチであった。農耕民のフツが存在していたルワンダに、後から牧畜民のツチがやってきて前者を征服し王国を築いたとされている。⁽²⁾放牧民で武力を持つていたため、少数のツチが多数のフツを支配することが可能になった。

ベルギーの植民地支配を受けた歴史的経緯から、ローマ・カソリックをはじめとするキリスト教徒が、虐殺前には人口の四分の三を占めていた。そのルワンダでムスリムが増えているという。

フツとツチは、実際には相互の婚姻も進んでおり、ツチが一般に身長が高いことを除けば、少なくとも外部者の目から区別することは難しい。それを間接支配の道具として、少数民族のツチを優遇し、エスニックを明記し

たＩＤカードを発行したのはベルギーであった。

フツもツチもともに多くがカトリックの信者であった。一九九四年の虐殺では、多くのツチがカトリック教会に逃げ込んだ。まさか神聖な教会では人殺しは行われないだろうと考えたからである。六二年のベルギーからの独立前より、多数派フツによる少数派ツチへの暴力はたびたび発生していたが、教会に逃げ込んだ者は危害を加えられなかつたという。

しかし一九九四年の虐殺時は違つていた。殺害を進めたフツの民兵（ミリシア）が「最も効率的に」人殺しを行つたために、一ヵ所にツチが集まるように誘導したという側面もある。国内に武器を行き渡らせた周到な準備、ラジオや新聞を使って繰り返し行われたプロパガンダ、いかに効率よく殺すか訓練された民兵の存在など、虐殺は周到に準備されていた。

タンザニア国境のニヤラブイエで行われた虐殺の生存者であるフェルディナンド氏（インタビュー当時五八歳）から、筆者が聞き取つた殺害の現状は以下の通りである。

「ツチに対する虐殺が始まってカトリック教会に逃げこんだ。なぜ教会だったのか？ 一九五九年の虐殺

時には、教会に逃げ込んだ人々は殺されずに済んだし、タンザニアへの道もすでにフツにより封鎖されたからだ。男は外で食料を探してたりして、教会の内部に居たのは大部分が女性と子供だった。

しっかり閉ざしていた教会のドアを開けさせて政府の役人とシルベスター（村長）が入ってきた時にはほつとした。なぜならば、彼らは私たちを助けに来たのだと思つていただから。ところが、彼らに駆け寄つた人たちまち殺されて最初の犠牲者になつた。

殺害のためよく練られた計画であることは後でわかつた。教会に集めておいて、外を三重に取り囲んでいたのだ。教会から逃げ出しても、殺戮者たちの最初の輪、それを逃れても第二、第三の輪から逃れることはできなかつた。その上で、三日間にわたる殺害が始まつた。マチューテ（鉈鎌）、銃、棍棒、矢などあらゆる道具が使われた。私は三人の子供と妻をそこで失つた。

一日目は折り重なる死体の下になつて逃れた。二日目の夜になつて、そこから抜け出して教会の外に出ようとしたら見張りに発見されたが、金を渡して見逃してもらつことができた。それから森の中に隠れて生き延びた」

ルワンダの各地に「ジェノサイド・プレイス」と呼ばれる虐殺の跡が残されている。フツのツチに対する行為を忘れないという現政権の方針でもある。その多くがカトリック教会だ。教会という祈りと平和の場が、集団殺害に使われたことに衝撃を受けずにはいられない。

教会が虐殺の現場となっただけではなく、一部のカトリック聖職者は虐殺に協力さえした。ゴーレイヴィイッチの『ジェノサイドの丘』他の記録では、銃を腰に吊るしてツチの信者狩りをする神父や、助けを求める人たちを焼き殺した修道女の話も出てくる。⁽²⁵⁾ それらの聖職者は虐殺が終了した後、多くは国外に逃亡し、ベルギーなどで裁かれることになった。

筆者がルワンダの首都キガリで話を聞いたムスリムによれば、「カトリックの教会に逃れた人は虐殺を免れなかつたが、イスラームのモスクに逃れた人は匿われて命を救われた」という。カトリックへの不信感から、虐殺終了後、イスラームへの改宗が相次いだ。ツチからの復讐を恐れたフツのイスラームへの改宗がこれに加わった。虐殺に関与したとされるイスラームの聖職者もいたが、のちに無罪だとわかつた。フツのムスリムが虐殺に関与しなかつたことと併せて、それらはルワンダのムスリム

の誇りであるという。

ルワンダのイスラームは元々、タンザニアにおけるタリーカの教団員数の約四分の三を占めると言われるカーディリー教団が伝播したものである。カーディリー教団はアブドゥルカーディル・ジーラーニーを始祖とする。彼はイラクで教育活動に携わり、その死後の一四五〇年世紀、彼の教えを伝えるために弟子たちによってタリーカが形成された。⁽²⁶⁾

「ニューヨーク・タイムズ」によれば、虐殺前には人口の7%であったムスリムが、虐殺後の二〇〇二年には一四%に達したという。同時期にルワンダ国内のモスクの数も倍以上の五〇〇に達している。⁽²⁷⁾

キリスト教への反作用としてイスラームへの改宗が進むという事例がルワンダには見られる。二一世紀になってイスラームへの改宗は一段落がついたと言うし、カトリックの信者はイスラームだけではなくセプテンバー・アドベンチストなどのプロテスタンントにも改宗している。

●注

(→) J. Haynes, "Religion and Politics in Africa," East African Educational Publishers: Nairobi, 1996, p. 27.

(2) 宮本正興・松田素一編『新書アフリカ史』、講談社現代新書、一九九七年、一三三ページ（赤阪賢）。

(3) 嶋田義仁『黒アフリカ・イスラーム文明論』、創成社、二〇一〇年、一〇〇・一一ページ。

(4) 嶋田、同書、七三ページ。同書によれば、アフリカにおいてイスラームが卓越した地域でのエイズ感染率は低いと言い、その背景には清潔習慣の徹底があると思われる。

(5) 『新書アフリカ史』、一〇五ページ（嶋田義仁）。また嶋田（一〇一〇年）。

(6) 嶋田義仁「西アフリカにおけるイスラーム問題——サハラをめぐって国際政治が動く——」、『外交フォーラム』一五五号、都市出版、一〇〇一年六月。

(7) R. Oliver, "The African Experiences," Weidenfeld & Nicolson: London, 1991, pp. 256-257.

(8) Haynes (1996), p. 40.

(9) 藤井千晶『東アフリカにおける民衆のイスラームは何を語るか——タリーカムスンナの医学——』、『ネルヴァ書房』、二〇一八年、七〇に第三章。

(10) 嶋田（一〇〇一年）、「四」一ページ。

(11) Haynes (1996), p. 71.

(12) Haynes (1996), p. 72.

(13) 嶋田（一〇〇一年）、「四」一ページ。

(14) そのような観点 자체、キリスト教がイスラームに比べて進歩的で優れた宗教であることを含意しており、本当にそ�だったのかは留意が必要であるように思われる。

(15) 『若波 イスラーム事典』、岩波書店、一〇〇一年、ほかに述べ。

(16) Haynes (1996), p. 212.

(17) 嶋田（一〇一〇年）、「はつめに」（註）。以下の記述も嶋田による。

(18) 筆者が研究で訪れるルワンダ共和国にあるモスクは、多くのカダフィの寄贈に起源を持っている。

(19) 白戸圭一「チロに走るイスラム過激主義勢力——統治力試されアフリカ大陸——」、『外交』、時事通信社、二〇一三年。

(20) 白戸圭一「同論文。

(21) ナイジェリアについての記述は、片倉もむい（編集代表）『イスラーム世界事典』、明石書店、一〇〇一年、による。

(22) 『岩波 イスラーム事典』による。

(23) Haynes (1996), p. 189.

(24) 武内進一「ルワンダのツチとフツ——植民地化以前の集團形成についての覚書——」、同編『現代アフリカの紛争——歴史と主体——』、アジア経済研究所、一〇〇〇年。同論文はこのようない通説に疑問を投げかけ、ツチとはルワンダの国家形成的過程で生まれた人種的イデオロギーを持った支配集團で、それ以外の人々が「ツチではない」という理由で「フツ」と呼ばれたとする

(25) フィリップ・ガーレイヴィッチ（Philip Gourevitch）（柳下毅一郎訳）『シ・ノ・サイム・シ・ヒ』（"We wish to inform you that tomorrow we will be killed with our families: Stories from Rwanda," 1998）WAV-E出版、一〇〇一年。

(26) 藤井（一〇一〇年）、「五」一ページ。

(27) "Since 94 Horror, Rwandans Turn Toward Islam," *The New York Times*, April 7, 2004. たゞこの数字は筆者の実感か、はやや誇大なよくな感を受けている。